

2021. 8. 1. 主日礼拝説教
聖書：マタイによる福音書5章9-12節
『平和を実現するために』

わたくしどもは毎年この8月の第一主日を平和主日として守り続けております。先程ご一緒に歌いました374番という難しい讃美歌は当教会でも初めて用いたものかと思えます。讃美歌21略解には次のように紹介されています。「これはフィリピンの詩人ローランド・ティニオが書いたインパクトの強い反戦歌です。戦争に夫をとられた妻が、子どもに子守歌をうたうという設定で書かれています。その表現は批判的でなく、攻撃的でもなく、むしろ夫の死の事実を淡々と語っています。それだけに、その奥にある嘆きの深さ、怒りの大きさが、人の心を揺り動かさずにはいません。『おやすみよ。父さんはすぐに帰るよ』という母の子守歌は、しかし、戦争に駆り出されている夫の安否を気遣う祈りにかわります。そして山間に戻った静けさとともに、『父さんは冷たくなって帰る』という知らせ。最後は、父の死骸に群がるハエを半ば放心状態で追う母の姿が、うつろに開いた亡き父の眼差しとともに子どもの脳裏に焼き付けられる一瞬が歌われます。」揺りかごのようにゆったりとしたメロディーが、癒されることのない悲しみを少しでも和らげようとする子守歌のように、わたしたちに「平和を実現するために」何をなすべきかが深く問われてゆきます。

もう一つご紹介するのは次のような話です。「アンネの日記」という世界中で読み継がれている本があります。たとえ読んだことがなくても、たいいてい人はこの本がナチスのために迫害され、やがて絶滅収容所で殺されたユダヤの少女の日記であることを知っています。この「アンネの日記」から「アンネ・フランクは今」というミュージカルが以前に上演されました。これはアンネと同時代を生きたひとりの日本人女性(教師)がふとしたことから「アンネの日記」を手がかりに、アンネが生きた場所を訪れていくところから物語は始められます。それらの過程で彼女はアンネがナチスに虐殺されたのが遠い昔の、遠い国の出来事などでは決してなかったことに気付いてゆきます。それは、当時のドイツが日本と軍事同盟を結んでおり、アンネと同年の自分はその時、女子挺身隊員として軍需工場で兵器を造っていた過去と重なり合った時、自分が無関係の第三者ではなく、アンネを殺す側の立場にあったことに気付いて行くのです。

この女性は、平和を願う自分がその平和を壊すことに協力していたことを知って打ちひしがれます。これをキリスト教的に表現すれば、自分の犯した罪に気づき、悔い改めると言うことでしょう。そして、「アンネ・フランクの今」の素晴らしいのはここからです。彼女は大変落ち込んで帰国しますが、家に帰る途中で、楽しそうに遊んでいる子どもたちの姿を見、そして歓声を聞いた時、そこにたくさんのアンネがいることに気づきます。今生きている自分がすべき事は、ただ罪を悔いることではなく、悲しむことでもなく、この子どもたちの歓声を守ることだと気がつくのです。

キリスト教信仰を以て「生きる」ということは、自分の力や能力で何かをしようという、いわば自分中心的に生きることではありません。そうではなく、神がわたしに何を求められているかという姿勢を持つことなのでしょう。言わば、他者中心に生きることなのです。わたしたちは「平和を実現するために」招かれています。その事実を自分の力で解決しようとするのではなく、他者との歩みの中から応えて行きたく願うのです。